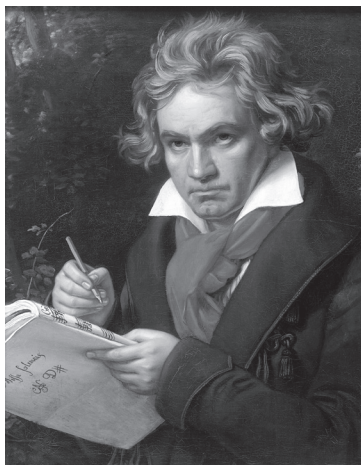




合唱付きの交響曲と ベートーヴェンの〈第九〉

西原 稔

ベートーヴェン (1770～1827)

交響曲と合唱

バッハの大規模な作品のなかで最も作品数が多いのは教会カンタータで、第1楽章は器楽合奏によるシンフォニアで始まり、続いて独唱や合唱という構成である。しかし、18世紀中葉にバロック時代から古典派に移行すると、器楽と声楽がはっきりと区別されるようになる。しかも、バッハのカンタータのようなジャンルは古典派に入ると極端にその作品数が減少するだけでなく、器楽合奏（シンフォニア）の楽器編成もオーボエ2本とホルン2本を基礎とする編成に限定される。バロック時代の合奏曲の楽器編成はきわ

めて多彩であった。

交響曲の閉じた表現を打破した最も画期的な作品が、1808年12月22日に交響曲第5番と第6番とともに初演されたベートーヴェンの〈合唱幻想曲〉（作品80）である。そもそもこの日の演奏会はベートーヴェン自身だけではなく、音楽史のきわめて大きな転換点で、ピアノ協奏曲第4番の公開初演と〈ミサ曲ハ長調〉が抜粋して演奏されている。この〈合唱幻想曲〉はベートーヴェンの得意とするピアノの即興演奏に始まり、第2部以降では合唱と6人の独唱者を含むだけではなく、交響曲の要素とピアノ協奏曲の要素も融合され、音楽のジャンルの壁を打ち破ったきわめて意欲的な作品である。特

に、第3部はその後、シラーのテキストを付して大幅に改訂されて〈第九〉の第4楽章に生まれ変わるのである。

〈合唱幻想曲〉の初演された1808年から、〈第九〉の初演された1824年までの間にベートーヴェンは、ウィーン会議参列の王侯に捧げた、合唱とオーケストラのためのカンタータ〈栄光の瞬間〉（作品136）という極めて規模の大きな作品を作曲している。そして、〈第九〉の演奏会でウィーン初演された〈ミサ・ソレムニス〉（作品123）の持つ意味はきわめて大きい。

19世紀前期になると合唱音楽への新たな関心が高まりをみせ、このころからドイツ語圏各地にアマチュア合唱団が設立され、特に宗教合唱作品が好んで作曲および演奏されるようになる。19世紀前期において最も人気が高かったのは、ベートーヴェンのピアノ協奏曲第5番〈皇帝〉の初演者でもあったフリードリヒ・シュナイダーが作曲し、1820年に出版されたオラトリオ〈最後の審判〉で、ドイツ語圏の市民階層はこぞってこの作品を歌い、合唱への関心が大きく高まった。

ベートーヴェンの“歓喜の歌”におけるオーケストラと合唱という編成については、フランス革命時にフランスで盛んに作曲演奏された、吹奏楽を伴う合唱という編成の作品からの影響が指摘されており、さらに第4楽章に登

場する軍隊行進曲にも革命式典の音楽の影響がみられる。

ベートーヴェン後の 19世紀前半の作品

合唱付き交響曲という編成には、単に音楽上の表現手法にとどまらず、当時の社会的な背景も深く関係していた。1840年にベルリオーズが、7月革命10周年記念に作曲した〈葬送と勝利の大交響曲〉（作品15）は、元来、吹奏楽と合唱の編成で作曲された作品で、その後弦楽器が加えられた。初稿の吹奏楽と合唱という編成は、フランス革命以来のフランスの伝統で、特にゴセックはこの編成による数多くの作品を手掛けている。この作品の前年の1839年にベルリオーズは独唱、合唱とオーケストラの編成の〈ロメオとジュリエット〉（作品17）を作曲するが、この作品は交響曲とオペラを融合したきわめて

スケールの大きな作品で、これもフランス独自の表現である。

〈葬送と勝利の



ベルリオーズ (1803～1869)

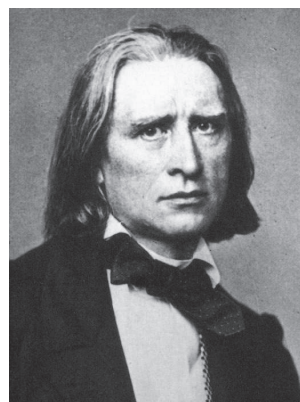
大交響曲)と同じ1840年に、メンデルスゾーンは交響曲第2番〈賛歌〉(作品52)を作曲した。この交響曲はきわめてドイツ的な作品で、ベートーヴェンの伝統とバロック時代における教会カンタータの融合である。3人の独唱者と合唱、オーケストラ、オルガンという編成のこの作品は、交響曲として演奏されるシンフォニアの後に、聖書をテキストとした長大なカンタータが接続する。メンデルスゾーンは、合唱団での演奏を目的に数多くの宗教合唱作品も作曲しており、この交響曲の作曲には彼のこうした経験が反映している。

19世紀後半から 世紀末の作品

交響曲の歴史を考えると、1827年のベートーヴェンの死と、1828年のシューベルトの死は大きな意味を持つ。そしてシューマンが交響曲第3番〈ライン〉を作曲した1850年がその次の大きな節目で、伝統的な交響曲の創作が一つの段落を迎える。それは音楽界だけの話題ではなく、1851年に第1回ロンドン万博が開催され、鉄とガラスのパヴィリオンが大きな話題をさらったことに象徴されるように、この時期を境に社会の在り方が大きく変化する。

19世紀後半の新しい波を最も敏感

にとらえていたのは、おそらくフランス・リストである。ピアノの巨匠の彼は、交響詩の



リスト (1811～1886)

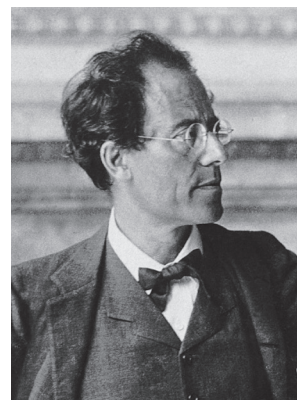
創作や合唱を伴う2曲の交響曲〈ファウスト〉と〈ダンテ〉によって新しい時代の扉を開いた。〈ミサ・コラーリス〉や〈レクイエム〉、オラトリオ〈聖エリザベトの伝説〉などの宗教音楽の作曲家でもあったリストは、合唱音楽に特別の意義を見出していた。1857年に初演された〈ファウスト交響曲〉では、第1楽章「ファウスト」、第2楽章「グレートヒェン」に続いて、第3楽章「メフィストフェレス」においてゲーテの『ファウスト』から「永遠に女性的なもの」が歌われる。〈ファウスト〉と同年に初演された〈ダンテ〉では、劇的な第1楽章「地獄」に続いて、第2楽章「煉獄^{れんごく}」に「マニフィカート」が付されて、感動的な合唱が入る。この2作品ともすぐれて宗教的な意味合いを持つ合唱で、リストの宗教音楽の創作と密接に結びついている。

文学的、あるいは哲学的な意味を含めて合唱を取り入れた作品としては、

世紀末ウィーンの作曲家マーラーの第2番〈復活〉および、第3番、第8番〈千人の交響曲〉が有名である。彼のこれらの作品は、合唱付き交響曲というよりも、交響的カンタータというのがふさわしい。

20世紀の作品

マーラーの例にみられるように1900年前後の時期は、合唱と管弦楽の編成が好んで作曲された。1892年に初演された『カレワラ』をテキストとしたシベリウスの〈クレルヴォ交響曲〉(作品7)や、1901年に初演されたスクリャービンの交響曲第1番も同様な傾向の作品である。〈クレルヴォ交響曲〉は作曲者の記載によると「交響詩」であるが、交響的カンタータというのがふさわしく、作品全体が物語を形成している。スクリャービンの作品では、



マーラー (1860～1911)

第6楽章に自分自身の詩による合唱が入る。1904年に初演されたブゾーニのピアノ協奏

曲は、フィナーレの第5楽章にアラーの神を題材とした合唱を持ち、ピアノ協奏曲と合唱が合体した珍しい例である。

20世紀で合唱付きの交響曲を手掛けた最も重要な作曲家はショスタコーヴィチである。彼の交響曲第2番(作品14)では、10月革命とレーニンを称える合唱がフィナーレに置かれ、交響曲第3番(作品20)では、作品の最後で「メーデー」を賛美する合唱が歌われる。その後、1962年に初演された晩年の交響曲第13番〈バビ・ヤール〉(作品113)では、エフゲニー・エフトゥシェンコ作の、ナチス・ドイツによるユダヤ人虐殺を題材とした詩が全5楽章で歌われる。ショスタコーヴィチのこれらの作品には、社会主義の政治的な抑圧やナチスの虐殺への問題意識が反映されており、音楽による社会へのメッセージが意図されている。

ベートーヴェンの作品を含めて合唱付き交響曲は、通常の交響曲とは明らかに異なる。それは器楽と声楽が融合しているだけではなく、ベートーヴェンの〈第九〉がそうであるように、合唱が入ることによってどの作品もある思想性を含んでいるからである。その意味で作曲家は音楽表現の究極の姿をこの編成に見出していると言っても過言ではない。

(にしはら みのる・桐朋学園大学教授)

心に残るクラシック

恩田 陸 — ①

Riku Onda

オーケストラの初体験

プロコフィエフ：三つのオレンジへの恋



©読売新聞社

私が通った高校の音楽の授業はちょっと変わっていた。というか、後から考えてみるとかなり異色だった。期末の試験で、得意な楽器の演奏をする、単位に振り替えてくれるのである。年に一度、その中から上手な生徒を集めてミニ・コンサートまでしていた。

音楽担当のT先生は、県の交響楽団の指揮などもしている、いわゆる名物教師であった。そもそも私が入学した時にはまだ旧校舎から新校舎への移行期で、特別教室は古いものと新しいものと両方使ったが、T先生はよい音楽室を作るよう、県に相当熱心に働きかけたそうで、確かに一学校の音楽室としてはステージもあり、小さなスタジオかホールかと思うほど音響もしっかりしていて、初めて新校舎の音楽室に足を踏み入れた時は、「わあすごい」と誰もが声を上げたほどで、相当に恵まれた環境だったと思う。

初めての期末試験で私はピアノを弾いたのだが（モーツァルトのピアノ・ソナタ第8番K.310）、T先生はたいそう誉めてくださり、顧問をしている吹奏楽部の演奏会のエキストラに呼んでくださった。なんの曲だったか忘れたが、たぶんハープのパートをピアノで弾いたのではなかったかと記憶している。その何回目かの練習の時、吹奏楽部の子と一緒に、県民会館のコンサートのチケットをもらったか買ったかして、みんなで聴きに行ったのだ。記憶はあやふやだが、恐らくNHK交響楽団のコンサートで、指揮はサヴァリッシュだったような気がする（当時はオーケストラの名前も、指揮者の名前もろくにチェックしていなかった）。

子供の頃、親に連れられてコンサートに何度か行ったことがあるけれども、ものごころついてからちゃんとオーケストラ演奏を聴きに行ったのはこの時が初めて。

そこで聴いたプロコフィエフの〈三つのオレンジへの恋〉が強烈に印象に残っている。他の曲は全く覚えていない。なんと、指揮者が最後の音のタクトを振り下ろすのと同時に、「どうだ!」というように満面の笑みで手を広げて、客席に向かってパッと振り返ったのである。

うわあっ、という大歓声。

鳥肌が立つような興奮があった。もちろん、客席は沸きに沸き、拍手喝采。あの時のカッコよさ、すごい高揚感があった。生のオーケストラで興奮したのはあれが初めてだった。

私は子供の頃から日記兼読書・映画・ステージ感想日記兼漫画や詩やお話の断片みたいなものをえんえんノートにつけているのだが、この日、うちに帰って、見開き二ページに、〈三つのオレンジへの恋〉のラストシーンの印象をカラーで絵に描いたのを覚えている。

それ以降、オーケストラの生演奏を再び聴くまでには長いブランクがあるのだが、最初に感心したのが〈三つのオレンジへの恋〉だったのは、今となっては非常に象徴的だったような気がするのである。

長い歳月を経てクラシックのCDを聴くようになり、ピアノコンクールの小説まで書いて、ようやくクラシックファンを名乗ってもいいかなと思うようになった昨今、聴けば聴くほど、し



プロコフィエフ（1891～1953）

みじみ「プロコフィエフって天才!」と感嘆するからだ。今回、この原稿を書くために実に二十ウン年ぶりに〈三つのオレンジへの恋〉のCDを購入して聴いてみたのだが、記憶の中のもの以上になんと素晴らしい曲であることか。結局、一週間くらい毎日ひたすら繰り返し聴いている。なるほど、私のクラシック・オーケストラの入口は間違っていなかったのだと、当時の自分を誉めたいような、不思議な心地がするのである。

profile おんだ・りく

宮城県生まれ。作家。2005年『夜のピクニック』で吉川英治文学新人賞と本屋大賞を、07年『中庭の出来事』で山本周五郎賞を受賞。17年、国際ピアノコンクールを題材とした『蜜蜂と遠雷』で直木賞と本屋大賞をダブル受賞した。

◎トロンボーン奏者

葛西修平

Shuhei Kasai

重厚な響きとハーモニーで オーケストラを支えたい

《今年8月に入団したピカピカの1
年生。読響での生活は慣れましたか》

初めての曲ばかりで、早めに楽譜を取り寄せたり、参考音源を聴いたりしています。まず、周りをよく聴き、読響伝統の重みを音で感じることが大切。本番での集中力や意気込み、迫力のある音など、改めてプロのオーケストラの凄さを今まさに実感しているところで、その一員となることができて幸せです。

トロンボーンは、3人で和音を重ねるハーモニー楽器。くわた あきら 栗田晃さんと篠崎卓美さんの二人の先輩によく面倒を見てもらっています。栗田さんは、憧れの人。実は、小学生の時初めて買ったトロンボーンのCDが、栗田さんのソロでした。今でも夢のような気持ちです。温厚でドンと構えていて、本番前の緊張や不安があっても「気にするな。大丈夫」と声をかけてくれます。《12月は一年間の締めくくり。マーラーの交響曲第3番、そして恒例の

《第九》が続きます。もちろん準備万端ですね》

入団して以来、読響サマーフェスティバルやマイスター指揮のマチネシリーズ、ワーグナーの楽劇《神々の黄昏》、メシアンの歌劇《アッシジの聖フランチェスコ》など、ほとんどのプログラムで演奏しています。

マーラーの交響曲第3番では、トロンボーンの長いソロがあり、これはなかなか珍しい。荘厳な低い音で、男らしい力強い響きを重ねていきますので、ぜひ期待してください。大学生の時に初めて読響を聴いたのが、このマーラーの3番でした。巡り合わせとは、不思議なものです。そして、《第九》。大変有名な曲ですが、演奏したことがなく、とても楽しみ。トロンボーンは男性の声の音域に近く、また教会で使われていたこともあり、合唱と溶け合い相性がいい。合唱パートとともに動くトロンボーンにも注目ですよ。

《1994年、茨城県生まれ。9歳からトロンボーンを始め、全日本ジュニアクラシックコンクール高校生金管部門1位、トロンボーンカルテットコンクール優勝。今年3月に東京音楽大学を卒業し、読響へ。小学生の時に、すでにプロとなる決意をしていたという》

姉の影響でエレクトーン教室に通いながら、学校行事などで目立っていた金管バンド部に小3から入部。先生が大変厳しかった記憶があります。第一志望がトランペットで、トロンボーンは第二志望。金管楽器はほとんどが指を使う「ピストン楽器」ですが、トロンボーンは「スライド楽器」。腕の長さや唇の形などで、先生にトロンボーンを勧められました。中高でも吹奏楽部に所属し、個人レッスンもそのころから始めました。

高校は県立ながら音楽科がある伝統校。吹奏楽部は音楽科だけではなく、普通科、家政科の生徒も所属していて、「音楽が大好き。音楽を楽しもう」という雰囲気でした。それがかえって良かったのと、アンサンブル力をつけることができました。そして、進学先は、吹奏楽が盛んで演奏を聴いて迫力があつた東京音大を選びました。

《最後に、トロンボーンの魅力を教えてください》

トロンボーンは、コントラバスに次いで、オーケストラの土台となる楽器で、弦楽器が花形ならば、「緑の下力持ち」といった存在でしょうか。重厚で繊細なハーモニー、多種多様な響きが魅力です。《第九》ではアルト、テナー、バスに分かれていますが、私はテナーを担当。各パートとのパイプ役であり、和音を動かす大切な役割が



あるので、自然体で吹いて響きが充実するように心がけています。それと当たり前ですが、冬は特に乾燥して唇が割れやすいので、普段からケアは欠かせません。

地元の茨城に時々帰って、中高生に音楽の指導をしています。クラシックだけでなく、とにかくまず音楽のファンが少しでも増えて欲しい。その一助になれば、と思っています。そして読響をもっと知ってもらいたい。個人的には、「今日のローブラスセクション、良かったね」と言ってもらえるように頑張りたいです。読響トロンボーンセクションのカラーでもあります。オーケストラを包み込み、支え、時にはガツンといきます。

楽しい! カンブルランが贈る《ニューイヤー・コンサート》

1/6 (土) 14:00 第203回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

1/7 (日) 14:00 第203回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

J. シュトラウスⅡ世: 喜歌劇〈こうもり〉序曲、ワルツ〈南国のバラ〉
ラヴェル: 亡き王女のためのパヴァーヌ
ヴィエニャフスキ: 華麗なるポロネーズ 第1番
デュカス: 交響詩〈魔法使いの弟子〉
オッフェンバック: 喜歌劇〈天国と地獄〉序曲
サン＝サーンス: 歌劇〈サムソンとデリラ〉から“バッカナール”
ワックスマン: カルメン幻想曲

J. シュトラウスⅡ世: トリッチ・トラッチ・ポルカ、ポルカ〈雷鳴と電光〉
ワルツ〈美しく青きドナウ〉

指揮: シルヴァン・カンブルラン(常任指揮者) ヴァイオリン: 三浦文彰



シルヴァン・カンブルラン



三浦文彰

“色彩の魔術師”が独自の解釈で描きあげるブルックナー

1/13 (土) 18:00 第574回 定期演奏会
サントリーホール

ブリテン: 歌劇〈ピーター・グライムズ〉から“4つの海の間奏曲”
ヴィトマン: クラリネット協奏曲〈エコー＝フラグメンテ〉(日本初演)
ブルックナー: 交響曲 第6番

指揮: シルヴァン・カンブルラン(常任指揮者) クラリネット: イェルク・ヴィトマン



イェルク・ヴィトマン

カンブルランが「ドイツ3大B」を指揮&名手ファウストと共演

1/19 (金) 19:00 第608回 名曲シリーズ
サントリーホール

1/20 (土) 15:00 第7回 パルテノン名曲シリーズ
パルテノン多摩大ホール

1/21 (日) 14:00 第100回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール

ブラームス: ヴァイオリン協奏曲
バッハ(マーラー編): 管弦楽組曲から
ベートーヴェン: 交響曲 第5番〈運命〉

指揮: シルヴァン・カンブルラン(常任指揮者) ヴァイオリン: イザベル・ファウスト



イザベル・ファウスト

1 月 公演の聴きどころ

1月の演奏会には、常任指揮者カンブルランが来日。6日と7日の《マチネーシリーズ》はニューイヤー・コンサート仕立てでお届けする。J. シュトラウスⅡ世のワルツ〈美しく青きドナウ〉やポルカなどウィーンの名曲と、デュカスの交響詩やオッフェンバックの序曲といったマエストロが得意なフランス音楽で、新年の幕開けを華々しく飾る。〈カルメン幻想曲〉などでは、NHK「真田丸」のテーマ曲演奏でも人気急上昇の三浦文彰が共演し、超絶技巧を披露する。

13日の《定期演奏会》では、ドイツ気鋭の作曲家・クラリネット奏者として高名なヴィトマンが、自作自演でクラリネット協奏曲を日本初演する。この曲はオーケストラ・パートがモダン・オーケストラとバロック・オーケストラに分かれ、ピッチ(音高)の異なる二つの群がエコーのように音を投げかけ波のように揺れるなか、独奏クラリネットが浮遊するという趣向を採る。なお、カンブルランは2006年にSWR(南西ドイツ放送)響を指揮して世界初演している。後半は、ブルックナーの交響曲第6番で、カンブルランによるブルックナー・シリーズの続編となる。これまでの演奏で「新しいブルックナー像を描いた」と絶賛されたカンブルランが、今回も新たな発見や驚きに満ちた演奏を繰り広げるだろう。

19日《名曲》、20日《パルテノン名曲》、21日《みなとみらいホリデー名曲》では、カンブルランが「ドイツ3大B」と呼ばれるバッハ、ベートーヴェン、ブラームスの作品を集めて振る。バッハ(マーラー編)の管弦楽組曲を取り上げるほか、メインのベートーヴェンの交響曲第5番〈運命〉では冴えた解釈で人気曲の新たな側面を引き出してくれるだろう。ヴァイオリン協奏曲では、欧州で活躍し近年急速に評価を高めているファウストが登場し、鋭い解釈でブラームス作品の奥深い音楽性を追求する。(文責: 事務局)

読響チケットWEB

検索

上岡敏之と木管メンバーが繰り広げる白熱のアンサンブル

2/6 (火) 19:30 第17回 読響アンサンブル・シリーズ
よみうり大手町ホール ※18:50から解説

《上岡敏之と読響木管メンバーによる室内楽》

ベートーヴェン：セレナーデ (Fl & Pf)

ルーセル：ディヴェルティスマン (六重奏)

プーランク：ピアノと木管のための六重奏曲 ほか

ピアノ：上岡敏之 フルート：倉田 優 (首席) オーボエ：北村貴子

クラリネット：金子 平 (首席) ファゴット：井上俊次 (首席) ホルン：日橋辰朗 (首席)



上岡敏之

ロシアの巨匠テミルカーノフが振る《極上のロシア音楽》

2/10 (土) 14:00 第204回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

2/11 (日) 14:00 第204回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

2/12 (月) 14:00 第101回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール



ユーリ・
テミルカーノフ

チャイコフスキー：ピアノ協奏曲 第1番 ラフマニノフ：交響曲 第2番

指揮：ユーリ・テミルカーノフ (名誉指揮者) ピアノ：ニコライ・ルガンスキー

練達の指揮が〈ローマの松〉で輝かしく壮大な響きを生む！

2/16 (金) 19:00 第575回 定期演奏会
サントリーホール

チャイコフスキー：幻想曲〈フランチエスカ・ダ・リミニ〉

ラフマニノフ：パガニーニの主題による狂詩曲

ラヴェル：組曲〈クープランの墓〉 レスピーギ：交響詩〈ローマの松〉

指揮：ユーリ・テミルカーノフ (名誉指揮者) ピアノ：ニコライ・ルガンスキー



ニコライ・
ルガンスキー

※ 一部曲目が当初予定から変更されました。

巨匠の至芸が心に響く テミルカーノフの〈新世界〉

2/20 (火) 19:00 第609回 名曲シリーズ
サントリーホール

2/21 (水) 19:00 第19回 大阪定期演奏会
フェスティバルホール (大阪)

2/22 (木) 19:00 名曲シリーズ 福岡公演
アクロス福岡シンフォニーホール



レティシア・モレノ

グリムカ：歌劇〈ルスランとリユドミラ〉序曲

プロコフィエフ：ヴァイオリン協奏曲 第2番

ドヴォルザーク：交響曲 第9番〈新世界から〉

指揮：ユーリ・テミルカーノフ (名誉指揮者) ヴァイオリン：レティシア・モレノ

小林研一郎が得意のチャイコフスキーで渾身のタクト！

3/3 (土) 15:00 第8回 パルテノン名曲シリーズ
パルテノン多摩大ホール

チャイコフスキー：弦楽セレナーデ

チャイコフスキー：交響曲 第5番

指揮：小林研一郎 (特別客演指揮者)



小林研一郎

胸に迫る旋律。マズアが振る《ドイツ・ロマン派名曲選》

3/10 (土) 14:00 第205回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

3/11 (日) 14:00 第205回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

ウェーバー：歌劇〈オイリアンテ〉序曲

メンデルスゾーン：ヴァイオリン協奏曲

シューマン：交響曲 第3番〈ライン〉

指揮：謙 = デイヴィッド・マズア

ヴァイオリン：アラベラ・美歩・シュタインバッハー



謙 = デイヴィッド・
マズア

俊英ナナシが R. シュトラウスの傑作で熱いドラマを生む！

3/16 (金) 19:00 第576回 定期演奏会
サントリーホール

モーツァルト (ブゾーニ編)：歌劇〈ドン・ジョヴァンニ〉序曲

ブゾーニ：ヴァイオリン協奏曲

R. シュトラウス：交響詩〈ツァラトゥストラはかく語りき〉

指揮：ヘンリク・ナナシ

ヴァイオリン：ルノー・カプソン



ヘンリク・ナナシ

聴衆を熱狂へと誘う、“炎のマエストロ”の〈幻想交響曲〉

3/20 (火) 19:00 第610回 名曲シリーズ
サントリーホール

3/21 (水) 14:00 第102回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール

ロッシーニ：歌劇〈セビリアの理髪師〉序曲

ビゼー：〈アルルの女〉第2組曲

ベルリオーズ：幻想交響曲

指揮：小林研一郎 (特別客演指揮者)



小林研一郎

お申し込み・
お問い合わせ

読響チケットセンター 0570-00-4390
(10:00~18:00/年中無休) ヨミキョー
ホームページ・アドレス <http://yomikyo.or.jp/>

NISSAY OPERA 2017 オペラ〈ルサルカ〉 静岡公演

■1/27 (土) 14:00 静岡市民文化会館 大ホール

指揮：山田和樹

演出：宮城聡

出演：竹多倫子、大槻孝志、妻屋秀和、与田朝子 ほか

ドヴォルザーク：歌劇〈ルサルカ〉(全3幕・チェコ語上演・日本語字幕付)

[料金] S ¥9,000 A ¥7,000 B ¥5,000

[お問い合わせ] 静岡市民文化会館 054-251-3751

《フレッシュ名曲コンサート》めぐろパーシモンホール 春のコンサート

■2/3 (土) 15:00 めぐろパーシモンホール

いわき公演

■2/4 (日) 17:00 いわきアリオス

指揮：大友直人

チェロ：水野優也

ドヴォルザーク／チェロ協奏曲

ドヴォルザーク／交響曲 第9番〈新世界から〉

[料金] S ¥3,500 A ¥2,800 学生 ¥1,000 (2/3)

S ¥4,500 A ¥3,500 B ¥2,500 学生 ¥1,500 (2/4)

[お問い合わせ] めぐろパーシモンホールチケットセンター 03-5701-2904 (2/3)

アリオスチケットセンター 0246-22-5800 (2/4)

松戸特別演奏会

■2/27 (火) 19:00 松戸・森のホール21

指揮：小林研一郎

ヴァイオリン：服部百音

モーツァルト／歌劇〈フィガロの結婚〉序曲

メンデルスゾーン／ヴァイオリン協奏曲

チャイコフスキー／交響曲 第6番〈悲愴〉

[料金] S ¥4,000 A ¥3,000

[お問い合わせ] 森のホール21チケットセンター 047-384-3331

右ページの広告にて読響主催公演(土曜・日曜マチネーシリーズ)と同日開催の公演が掲載されています。

読売テレビ開局60年記念 © Hanns Joosten

TAKENAKA presents

読売テレビが主催する公演のご案内



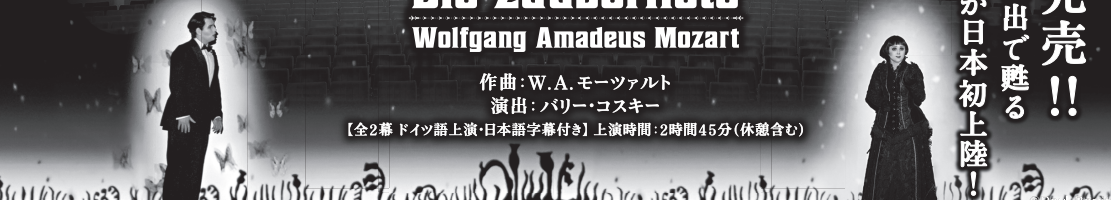
世界中で連日完売!!
ドイツ・ベルリンより、新演出で魅る
モーツァルト最後のオペラが日本初上陸!

ベルリン・コーミッシュ・オーパー
オペラ
魔笛

Die Zauberflöte
Wolfgang Amadeus Mozart

作曲：W.A. モーツァルト
演出：バリー・コスキー

【全2幕 ドイツ語上演・日本語字幕付き】上演時間：2時間45分(休憩含む)



東京

4月7日 14:00 開演
19:00 開演
8日 13:00 開演

Bunkamura オーチャードホール

S ¥28,000 A ¥23,000 B ¥18,000 C ¥14,000 D ¥10,000 SS ¥33,000

・Bunkamura チケットセンター 03-3477-9999 (オペレーター対応/10:00~17:30)

・オンラインチケット MY Bunkamura (要事前登録・PC & スマートフォン)

http://www.bunkamura.co.jp/mybunkamura/

・チケットぴあ 0570-02-9999 (Pコード:339-777)

・ローソンチケット 0570-000-407 (オペレーター対応/10:00~20:00)

・イープラス http://eplus.jp/komischeoper-berlin/ ほか

ぴあ、各コンビニエンスストア、東急シアターオーブチケットカウンター(11:00~) Bunkamura チケットカウンター

お問合せ：サンライズプロモーション東京 0570-00-3337 (10:00~18:00)

広島

4月11日 14:00 開演
19:00 開演

広島文化学園HBGホール

S ¥26,000 A ¥21,000 B ¥17,000 C ¥13,000 D ¥9,000 SS ¥32,000

・チケットぴあ 0570-02-9999 (Pコード:336-552)

・ローソンチケット 0570-084-006 (Lコード:61788)

・イープラス http://eplus.jp/komischeoper-berlin/ ほか

ぴあ、各コンビニエンスストア、エディオン・広島本店プレイガイド

お問合せ：キョードー西日本 092-714-0159 (月~金 10:00~19:00、土 10:00~17:00)

兵庫

4月14日 14:00 開演
19:00 開演
15日 14:00 開演

兵庫県立芸術文化センター
KOBELCO 大ホール

S ¥27,000 A ¥22,000 B ¥17,000 C ¥13,000 D ¥9,000 SS ¥32,000

・芸術文化センター

チケットオフィス 0798-68-0255 (10:00~17:00、月曜休、祝日の場合翌日休)

・チケットぴあ 0570-02-9999 (Pコード:340-143)

・ローソンチケット 0570-08-4005 (Lコード:57058) ほか

ぴあ、各コンビニエンスストア、芸術文化センターチケットオフィス(10:00~17:00、月曜休、祝日の場合翌日休)

お問合せ：キョードーインフォメーション 0570-200-888 (10:00~18:00)

*全席指定・税込 ※未就学児入場不可 ※開演は各公演の45分前予定 ※開演時間に遅れますと長時間お待ちいただく恐れがあります。時間に余裕をもってお越しください。※0570で始まる電話番号は、一部の携帯電話・PHS・IP電話からはご利用になれません。※音声自動応答での受付番号はダイヤル回線からのご利用はできません。プッシュ回線またはトーン信号の出る電話機からおかけください。



総監督／首席演出家

バリー・コスキー

2017年からバイロイト音楽祭演出のバリー・コスキーが、ベルリン・コーミッシュ・オーパーで「魔笛」を新演出(2012年初演)ついに日本初上陸!



指揮者

東京/兵庫公演

ガブリエル・フェルツ



指揮者

東京/兵庫公演

ジョーダン・デ・スーザ

©Brent Callis



指揮者

山田和樹

©Yoshinori Tsuru

日本で初めて海外オペラを指揮

驚きの舞台映像は公式HPまで!

http://www.kob-japan2018.com

KOB 魔笛 検索 ytv



読響が2018-19シーズンにお届けするコンサート、今月号では、土曜／日曜マチネシリーズと、みなとみらいホリデー名曲シリーズの演目をご紹介します。週末や祝祭日の午後に、ゆったりとした気分で名曲の数々をお楽しみいただきます。



土曜／日曜 マチネシリーズ



シルヴァン・カンブルラン
©Lisa-Marie Mazzucco

任期最後のシーズンを迎える常任指揮者シルヴァン・カンブルランを軸に、バラエティ豊かな出演者が親しみやすいプログラムをお届けします。

カンブルランは2010年4月の就任以来、楽団の実力を引き上げ、フレッシュな魅力を加えてきました。まず4月は、バロックから古典派に至るクラシカルなレパートリーに集中します。モーツァルトのヴァイオリン協奏曲第5番〈トルコ風〉でソロを務めるのは、古楽器の世界でも名をとどろかせる気鋭、



佐藤俊介
©Giliel-Marie Zimmermann

佐藤俊介です。リズムが躍動するメインのベートーヴェン交響曲第7番も、カンブルランの手に掛かれば、あっと驚くマジックが現出することでしょう。

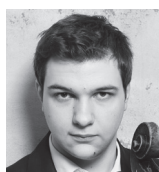
9月は打って変わってオール・チャイコフスキー・プロ。〈ロココ風的主題による変奏曲〉では、2015年のチャイコフスキー国際コンクールを制した

チェロの才人、アンドレイ・イオニーツァを独奏に迎えます。メインの交響曲第4番では、この作品の既存イメー

ジを突き崩す新鮮な解釈が楽しみです。最後の19年3月は“おはこ”のペルリオーズ〈幻想交響曲〉で締めます。ベートーヴェンのピアノ協奏曲第3番では、マエストロと同じフランス出身のピエール＝ロラン・エマー

ル＝ロラン・エマーが目の覚めるような解釈で応えます。

2018年4月から読響の首席客演指揮者に加わる山田和樹は、19年1月に登場します。名門スイス・ロマンダ管弦楽団の首席客演指揮者を歴任するなど、ラテン系のテイストとは相性が良い俊英らしく、ラヴェルの2曲にリムスキー＝コルサコフ〈シェエラザード〉と華麗な色彩感にあふれる名品を並べま



アンドレイ・イオニーツァ
©Thomas von Wittich



ピエール＝ロラン・エマー
©Marco Borggreve



山田和樹
©読響



ホアキン・アチュカロ
©Jean-Baptiste Millot



小林研一郎
©読響



タムシン・ワリー＝コーエン
©Patrick Allen, operaomni.co.uk



ジョヴァンニ・アントニーニ
©David Ellis WEB



アヴィ・アヴィタル
©読響



アジス・ショハキモフ
©Mischa Blank sw

す。ラヴェルのピアノ協奏曲で共演するのはスペインの長老、ホアキン・アチュカロです。

翌2月は、読響特別客演指揮者の小林研一郎がタクトを取る名曲選。ベートーヴェン〈運命〉を熱っぽく大迫力でお送りします。チャイコフスキーのヴァイオリン協奏曲は英国出身の名花、タムシン・ワリー＝コーエンがソリストです。

客演に訪れる5人の指揮者は、いずれも読響初登場となる優れた才能ばかり。最も注目されるのは古楽界の風雲児、ジョヴァンニ・アントニーニ(10月)でしょう。マンドリンの名手アヴィ・アヴィタルとヴィヴァルディやバッハの協奏曲を共演するほか、みずから主宰する古楽器団体と全曲演奏に挑んだハイドンの交響曲から、人気の第100番〈軍隊〉を取り上げます。ウズベキスタン出身で、マーラー国際指揮者コンクール第2位に

弱冠21歳で輝いた新鋭アジス・ショハキモフは、チャイコフスキーの交響曲第5番をメインにしたロシア・プロを振ります(4月)。フランス生まれでベルギーのモネ王立劇場音楽監督などを歴任したルドヴィク・モルローは、お国物のドビュッシー、ラヴェルにガーシュイン〈ラプソディ・イン・ブルー〉など、洒落た感覚の名品を特集(7月)。人気ジャズ・ピアニストの小曽根真が独奏を務めます。

フィンランドからはヘルシンキ・フィル首席指揮者などを経験した実力派、ヨーン・ストルゴーズが来演します(8月)。ドヴォルザーク〈新世界から〉を涼やかに聴かせるでしょう。年末恒例のベートーヴェン〈第九〉公演は、欧州の歌劇場でキャリアを重ね、声楽の扱いに長けたイタリアのマッシモ・ザネッティがタクトを執ります。ソプラノのアガ・ミコライなど独唱陣も豪華です。



ルドヴィク・モルロー
©Lisa-Marie Mazzucco



小曽根真
©藤山記信



ヨーン・ストルゴーズ
©Marco Borggreve



マッシモ・ザネッティ
©Mauro Turati



アガ・ミコライ
©Wernicke

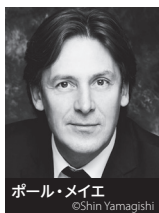
みなとみらいホリデー名曲シリーズ

週末の港町・横浜にふさわしいリラックスしたムードで、親しみやすい傑作を満喫できる《みなとみらいホリデー名曲シリーズ》は毎年、高い人気を誇っています。常任指揮者カンブルランはこのシリーズにも3回登場し、選りすぐった名品ばかりをお届けします。8年かけて練り上げた、読響とのコンビの集大成をお楽しみください。



シルヴァン・カンブルラン

4月は季節柄に合わせて、ストラヴィンスキー〈春の祭典〉を中心にスタート。カンブルランならではのシャープな感覚が引き立つでしょう。クラリ

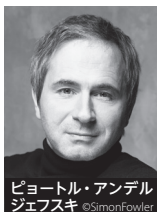


ポール・メイ

ネットのポール・メイエを迎えたモーツァルト〈クラリネット協奏曲〉とドビュッシー〈クラリネットと管弦楽のための第1狂詩曲〉では、フランス人同士の顔合わせならではの軽妙な掛け合いが、ステージに華を添えます。

9月はブルックナーの人気作、交響曲第4番〈ロマンティック〉を核にしたドイツ系プログラム。旧来のブルックナー解釈を打ち破る鮮やかなアプローチで話題を呼びそうです。その前半では、円熟を増すピョートル・アンドルジェフスキがモーツァルトのピアノ

協奏曲第24番を弾きます。最後の19年3月は、カンブルラン得意のオール・フランス・プロで締めくくります。イベールの〈寄港地〉にフルート協奏曲（独奏＝サラ・ルヴィオン）、ドビュッシーの〈前奏曲集（ツェンダー編）〉に交響詩〈海〉と、海つなかりの作品でコンチェルトを挟みます。かぐわしいエスプリが会場を包み込むでしょう。



ピョートル・アンデルジェフスキ



サラ・ルヴィオン

首席客演指揮者のコルネリウス・マイスターは6月、民俗的な旋律美にあふれるドヴォルザークの交響曲第8番をメインにしたプログラムを振ります。スメタナの歌劇〈売られた花嫁〉序曲で幕開けし、ブルッフの〈スコットランド幻想曲〉では読響コンサートマスターの長原幸太が独奏者としてステージに立ち、見事な腕前を披露します。この回は当シリーズのみの企画で、貴重な聴きものとなります。



コルネリウス・マイスター



長原幸太

読響特別客演指揮者の小林研一郎



小林研一郎



牛田智大

は、読響との全集録音CDが好評なブラームスの交響曲から第2番を重厚に響かせます（19年2月）。前半では伸び盛りの若き才能、牛田智大をソリストに迎え、チャイコフスキーのピアノ協奏曲第1番を熱っぽく仕上げます。

ゲストとして来演する3人の指揮者は、いずれも確かな手腕の持ち主です。イスラエル出身の鬼才、イラン・ヴォルコフは、ムソルグスキー（ラヴェル編）の〈展覧会の絵〉をドラマチックに演出して、オーケストラの機能を全開にします（5月）。メンデルスゾーンのヴァイオリン協奏曲ではイギリスの若き実力派、クロエ・ハンスリップが流麗なソロを奏でます。

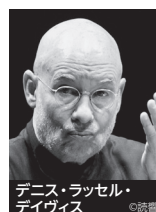


イラン・ヴォルコフ



クロエ・ハンスリップ

米国生まれのベテラン指揮者、デニス・ラッセル・デイヴィスは、英国や北欧の作品による滋味あふれるプログラムです（11月）。男性的で雄渾な旋律がクライマックスを



デニス・ラッセル・デイヴィス

は、読響との全集録音CDが好評なブラームスの交響曲から第2番を重厚に響かせます（19年2月）。前半では伸び盛りの若き才能、牛田智大をソリストに迎え、チャイコフスキーのピアノ協奏曲第1番を熱っぽく仕上げます。

形作るシベリウスの交響曲第1番で、ダイナミックなリードを見せるでしょう。寂寥感^{せきりょう}が全編に漂うエルガーのチェロ協奏曲では、オランダの新鋭チェリスト、ハリエット・クリーフがしみじみと心に沁^しみ入る独奏を聴かせます。古くから女性奏者が得意としてきた傑作にどんな歴史を付け加えるのか、期待が高まります。この2回も当シリーズのみの企画で、他会場では聴けないプログラムとなります。



ハリエット・クリーフ

年末恒例のベートーヴェン〈第九〉公演に登場するのは、イタリア出身の俊英指揮者で、ドイツなどの歌劇場でじっくり実力を蓄えたマッシモ・ザネッティ（12月）。欧米で活躍する歌姫、アガ・ミコライ（ソプラノ）のほか、日本からはメゾ・ソプラノの清水華澄、バスの妻屋秀和と定評あるソリストがそろいます。充実した独唱陣と新国立劇場合唱団で“歓喜の歌”を盛り上げます。



マッシモ・ザネッティ



アガ・ミコライ



清水華澄



妻屋秀和